

# わたしの聖戦

◎女性が働くということ◎◎◎3

医学ジャーナリスト 植田美津江

## 美人の査定

もう2年前になるが、観光客として北朝鮮に行ったことがある。北朝鮮といえば、現在イラクと並んで最も世界中から注目されている国であり、日本でも例の拉致問題とのかみで、まさに悪魔のごとくみなされる「近くて一番遠い国」の印象が色濃い。

2年前はもう少し情勢が穏やかな時期であり、6年ぶりに飛んだ直行便は総勢100人弱の乗客でほぼ満席状態、中には米などの食料品を届けるために乗り込んだ一行もあった。

寒い地域には色白の美人が多いというのはほぼ通説だが、北朝鮮のチャ

近頃では男子学生やサラリーマン世代の男性も整形する時代となった。

顔かたちを変えることで、自分に自信が生まれ、他人と会うことも人前で話すこと苦にならなくなった、あるいは仕事が多くなり、あるいは仕事が多くなり、うまくいくようになった、

てしまった。

しかし、美人は得であること認めたとしても、「仕事ができる」ことを意味しない。美人は仕事の入りのあたりにかなり有利であっても、自分から見て納得のいく仕事を遂行し、それが会社や社会にとって有益な結果をもたらすにいたるまでには、外見とは関係のないところで努力や学習や経験が求められるのだ。



その際に、美人はつい周囲に甘やかされがちとなり、地道な努力を怠ってしまうために、仕事で「できる」人物像とはかけ離れてしまうことが多い。美人が真に得かどうか問われるのはこのあたりの事情によるものである。仕事をすることで美人は確かに得であるが、その利点を生かせるかど

うかはまた別の問題。特に年を取っていくにつれて美人であることの優位性は薄れていくばかりである。

日本のフライング乗務員にも美人が多く、なぜか男性陣はその仕事内容ではなく彼女らの容姿を主に評価してきたが、これは明らかに海外事情に反する現象である。

美人で勝負することができるのはほんの一瞬のことであり、成熟した国際社会はそれだけで通用するほど甘くはない。真のサービスや仕事に対する厳しい姿勢にこそ価値を見出さなければならぬはずだが、いつまでも幼稚な国はもしかしたら若さや美人を過大評価しがちなのではないか……？、これはよその国のことではなく、日本の話として考える必要がありそうである。

(財)愛知診断技術振興財団理事・研究所長

イラスト・三浦義雄

タイトル・浅井健史